

のみで、DOAの救命は極めて困難であった。蘇生例では救急車内での心停止及び、心停止から10分以内の病院到着例が多く、心停止直後の一次救命処置に加え、10分以内の二次救命処置が蘇生に必要と考えられた。しかし、蘇生例でも10例は、重篤な脳障害のため死亡しており、脳保護対策の重要性が再認識された。

5) 下腿開放骨折治療成績の検討

星野 正・勝見 政寛
山本 康行・大滝 長門
高橋 勇二・谷代 弘三 (新潟中央病院)
勝見 裕・平野 明 (整形外科)

当科で過去11年間に加療した下腿開放骨折177例180肢の治療成績について検討した。

年齢別では5才から10才、15才から20才にピークがあり、受傷原因は交通事故が最も多くみられた。

創の程度(ガスティロ分類)により分類すると、タイプI 40肢、タイプII 106肢、タイプIII 34肢であり、損傷の大きいもの程骨癒合に長期を要する傾向にあった。

感染率は、保存的治療群で4.3%、一次的骨接合群で17.0%、二次的骨接合群で7.3%であり、一次的骨接合群に頻度が高い傾向にあった。

下腿開放骨折では血管損傷を有する例や、高度の浮腫によりコンパートメント症候群を呈し、緊急に減張切開術や植皮術を要する例がある。さらに骨髓炎併発例や偽関節例等のように、骨接合に難渋する例が時折みられるため、十分な注意と適切な治療が必要となる。

6) 観光地に於ける外科系救急の特性

小林 英司(新潟県立津川病院外科)

著者は新潟県のそれぞれ冬と夏の代表的な観光地である六日町と相川町で勤務する機会があった。そこで経験した症例を通して、救急疾患の多様性とそれぞれの観光地における緊急疾患の特異性について検討した。

六日町は新潟県南魚沼郡に位置し、32余のスキー場を抱える。シーズン中は、スキー場で年間約70名の重症な救急患者が発生した。緊急疾患の種類は多岐に及び幅広い知識と対応が必要であった。相川町では、珍しい海洋動物による障害を経験した。地域による特異性を考えた経年的調査の必要性を感じた。いずれの地でも観光シーズン中の人口急増に対するなお一層の救急医療体制の充実が望まれた。

7) 外傷性横隔膜ヘルニアの3例

平原 浩幸・佐藤 攻
若桑 隆二・田島 健三 (長岡赤十字病院)
和田 寛治 (外科)
松田由起夫 (同 小児外科)
佐藤 良智 (同 胸部外科)

当院では、過去10年間に腹部外傷により106例の緊急手術を行い、5例の外傷性横隔膜ヘルニアを経験した。最近経験した3例を報告した。

3例のうち、2例は交通事故が原因であり、1例は転落が原因で遅発性に発生した例であった。いずれも緊急手術が施行されており、左横隔膜が破裂していたが、1例に心嚢破裂を合併していた。脱出臓器は1例目は肝臓、2例目は胃・横行結腸、3例目は小腸であった。手術は3例とも横隔膜を直接縫合閉鎖したが、心嚢破裂合併例では、Mesh Patchで心嚢破裂部の閉鎖を行った。2例は軽快退院となったが、心嚢破裂合併例では術後心筋挫傷による心タンポナーゼで死亡した。

受傷時の胸部単純X線写真でいずれも横隔膜ヘルニアの診断が可能であり、CTでは脱出臓器の診断に有用であった。

8) ミオグロビン血症を合併した多臓器損傷の1例

玉谷 真一・外山 孚 (長岡赤十字病院)
原 直行・小田 温 (脳神経外科)

交通外傷後に高ミオグロビン(Mb)血症を合併し急性腎不全に陥った症例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告した。症例は56才男性。歩行中乗用車と接触転倒受傷、脳幹部を含めた脳挫傷あり来院時より昏睡状態でバルビツレート療法を開始した。右足背動脈拍動触知できず腹部損傷による右大腿動脈閉塞症と診断、血栓除去並びに左右大腿動脈バイパス術を施行した。受傷3日目より乏尿状態出現、血中尿中Mb異常高値を示しており、高Mb血症による急性腎不全と判明、連日血液透析施行した。右下肢は血行再建術数日後再び血行不全となり、下肢切断術を施行したが、DIC合併、全身状態改善されず、MOFにて受傷11日後に死亡した。高Mb血症に急性腎不全を併発したとの報告はいくつか認められ、その原因は多岐にわたる。治療はMbの排泄を中心に、時には患肢切断等の外科的処置も必要とされる。本症例の場合はDICを合併MOFとなり救命できなかったが、救命のためには疾患合併の予測、早期発見、集約的治療が不可欠と考えられた。